ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違の由来と発展

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す

外文出版社

北京

ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違の由来と発展

ソ連共党産中央委員会の公開書簡を評す

『人民日報』編集部
『紅旗』誌編集部
(1963年9月6日)

外文出版社
北京

目次

ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違の由来と発展……『人民日報』編集部『紅旗』誌編集部……七
ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す（一九六三年九月六日）

付録一
平和移行の問題にかんする意見の要綱……（一九五七年十一月十日）……七三

付録二
ブカレストの兄弟党会談における中国共産党代表団の声明……（一九六〇年六月二十六日）……七八

付録三
ソ連共産党中央委員会の通知書にたいする中国共産党中央委員会の返書のなかの、意見の相違を解決し、団結をかちとることについての五項目の提案……（一九六〇年九月十日）……八三

声　明

ことしの七月十四日、ソ連共産党中央委員会は、ソ連の各級党組織と全共産党員にあてた公開書簡を発表した。

中国共産党中央委員会スポークスマンは、七月十九日の声明のなかで、「ソ連共産党中央委員会のこの公開書簡は、中国共産党中央委員会の六月十四日づけの書簡を評価したものである。中国共産党中央委員会は、この書簡の内容は事実に合致しないものであり、その観点はわれわれの同意できないものである、と考える。中国共産党中央委員会は適当な時期に、事実をあきらかにし、論評をくわえるであろう」とのべた。

『人民日報』をはじめ、中国の他の全国的な新聞とすべての省、市クラスの新聞は、七月二十日、ソ連共産党中央委員会の公開書簡の全文を掲載した。中国の放送局もまたこの公開書簡の全文を放送した。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡が発表されたのち、ソ連の全国的な新聞、雑

誌はまたもや中国を攻撃した論文と資料を三〇〇編ちかくも発表した。『人民日報』はすでにそのいちぶの要旨を発表した。

『人民日報』編集部と『紅旗』誌編集部は、きょうからぞくぞく論文を発表して、ソ連共産党中央委員会の公開書簡に論評をくわえることにする。

一九六三年九月六日

『人民日報』編集部
『紅　旗』誌編集部

ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違の由来と発展

ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す

『人民日報』編集部
『紅　旗』誌編集部
（一九六三年九月六日）

ソ連共産党中央委員会が七月十四日、ソ連の各級党組織と全共産党員にあてた公開書簡を発表してからすでに一カ月あまりになる。ソ連共産党指導部がこの公開書簡を発表したことと、その後にとった一連の行動は、すでに中ソの関係を決裂のせとぎわにおしやり、国際共産主義運動の意見の相違を、かつてみない重大な段階におしやった。

いま、モスクワ、ワシントン、ニューデリー、ベオグラードの仲が熱くなり、ソ連の新聞、雑誌はひっきりなしに、中国を攻撃する奇怪な言論を掲載している。ソ連共産党指導部は、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を公然とうらぎり、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明を公然とやぶり、中ソ友好同盟相互援助条約に公然とそむいて、アメリカ帝国主義と連合

し、インドの反動派と連合し、裏切り者チトー一味と連合して、社会主義の中国に反対し、すべてのマルクス・レーニン主義政党に反対している。

当面の国際共産主義運動の意見の相違、中ソ両党の意見の相違は、一連の重大な原則的な問題にかかわる意見の相違である。中国共産党中央委員会は、ソ連共産党中央委員会あての六月十四日づけの書簡のなかで、すでにこうした意見の相違の本質を体系的に、全面的にあきらかにした。中国共産党中央委員会は、この書簡のなかで、当面の国際共産主義運動の意見の相違、中ソ両党の意見の相違は、とどのつまり、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明の革命的原則が必要かどうかの意見の相違であり、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義が必要かどうかの意見の相違であり、革命をやるかやらないか、帝国主義に反対するかしないかの意見の相違であり、また、社会主義陣営の団結、国際共産主義運動の団結が必要かどうかの意見の相違であることを指摘した。

国際共産主義運動の意見の相違、ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違は、一体どのようにして生まれたのであろうか、また、一体どのようにして現在のこのように重大な事態にまで発展したのであろうか。これはみんなが関心をよせている問題である。

われわれは、一九六三年二月二十七日づけの『人民日報』の社説「意見の相違はどこからくるか」という論文のなかで、国際共産主義運動の意見の相違の由来と発展を概括的にのべたことがある。当時、われわれはこの問題に関係のあるいくつかの事実、とくにソ連共産党指導部に関係のあるいくつかの重要な事実については意識的に保留して、ソ連共産党指導部のために余地をのこし、必要な時に真相をあきらかにし、是非をはっきりさせるつもりでいた。ところが、いま、ソ連共産党中央委員会の公開書簡が意見の相違の由来と発展というこの問題で、多くのウソをつき、事の真相をまったくねじまげているので、われわれとしても、いくつかの事実をあげてこの問題をくわしく説明しないわけにはいかなくなったのである。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、事実の真相を自分の党員と人民大衆に告げることを恐れている。ソ連共産党指導部は、マルクス・レーニン主義者にふさわしい公明正大な、事実にそくして真理をもとめる態度をとらず、ブルジョア政客のよくつかう事実をねじまげ、是非を転倒させるやり方で、意見の相違が生まれ、拡大された責任をひたすら中国共産党になすりつけようとしている。

レーニンはかつて、「政治における誠実さは、強さの結果であり、偽善は、弱さの結果である」といったことがある。マルクス・レーニン主義者はいつでも誠実な態度をとり、いつでも事実を尊重するものである。ただ政治的に堕落した人たちだけがウソにたよって生きていくのであ

る。

事実はもっとも雄弁である。事実はもっともよい証人である。われわれはやはり、事実を見てみることにしよう。

意見の相違はソ連共産党第二十回大会からはじまったものである

俗に、「三尺の氷は一日の寒さでは張らぬ」という。当面の国際共産主義運動の意見の相違も、もちろん、いまにはじまったものではない。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、国際共産主義運動の意見の相違がまるで一九六〇年四月にわれわれの発表した「レーニン主義万歳」など三つの論文からひきおこされたかのような論法をさかんにばらまいている。これはまったくのでたらめである。

事実は一体どうなのであろうか？

事実は、国際共産主義運動の一連の原則的な意見の相違は、すでに七年以上もまえからはじまっているのである。

具体的にいうと、この意見の相違は一九五六年のソ連共産党第二十回大会からはじまったものである。

ソ連共産党第二十回大会は、ソ連共産党の指導部が修正主義の道をあゆみはじめた第一歩である。ソ連共産党第二十回大会からこんにちまで、ソ連共産党指導部の修正主義路線は発生、形成、発展、そして体系化の過程をへてきた。ソ連共産党指導部の修正主義路線にたいする人びとの認識も、しだいに深まってゆくという過程をへてきた。

われわれは、ゆらい、ソ連共産党第二十回大会が現代の国際闘争と国際共産主義運動についてうちだした観点の多くはまちがったものであり、マルクス・レーニン主義にそむくものであると考えている。とくに、いわゆる「個人迷信反対」を口実にしてスターリンを全面的に否定したことと、いわゆる「議会の道」をへて平和的に社会主義に移行するという、この二つの問題はなおさら、きわめて重大な原則的な誤りである。

ソ連共産党第二十回大会のスターリンにたいする批判は、原則のうえでも、方法のうえでも、ともにあやまっている。

スターリンの生涯は偉大なマルクス・レーニン主義者としての生涯であり、偉大なプロレタリア革命家としての生涯であった。レーニンが逝去してのち三十年間、スターリンはソ連共産党と

ソ連政府のおもな指導者であり、また国際共産主義運動の公認された指導者であり、世界革命の旗手でもあった。スターリンはその生涯でいくつかの重大な誤りをおかした、しかし、これらの誤りもかれの偉大な功績とくらべればなんといっても第二義的なものである。

スターリンは、ソ連の発展と国際共産主義運動の発展に偉大な功績があった。われわれは、一九五六年四月に発表した「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」という論文のなかでつぎのようにのべた。

「レーニンの死後、党と国家のおもな指導的人物としてのスターリンは、マルクス・レーニン主義を創造的に運用し発展させた。そして、レーニン主義の遺産をまもり、レーニン主義の敵――トロツキストやジノヴィエフ一味、その他ブルジョアジーの代理人に反対する闘いのなかで、彼は人民の意志と願望とを示したのであり、傑出したマルクス・レーニン主義の闘士としての名にそむかなかった。スターリンがソ同盟人民の支持をえ、歴史上で重要な役割をはたすことができたのは、まず第一に、彼がソ同盟共産党のその他の指導者といっしよになってソビエト国家の工業化と農業集団化についてのレーニンの路線をまもったがためであった。ソ同盟共産党は、この路線を実行にうつして、ソ同盟において社会主義制度の勝利をもたらすとともに、ヒトラーに反対する戦争でソ同盟が勝利をかちとる条件をもつくりだした。そして、ソ同盟人民のこれら一切の勝利は、全世界の労働者階級とすべての進歩的な人びとの利益に合致するものであった。そのために、スターリンというこの名も、おのずから全世界できわめて高い栄誉をになうようになった。」

スターリンの誤りは批判すべきものである。だが、フルシチョフ同志がソ連共産党第二十回大会でおこなった秘密報告は、スターリンを全面的に否定し、プロレタリアート独裁をみにくくえがき、社会主義制度をみにくくえがき、偉大なソ連共産党をみにくくえがき、偉大なソ連をみにくくえがき、また国際共産主義運動をもみにくくえがいている。かれは、プロレタリア革命政党の批判と自己批判の方法を運用して、プロレタリアート独裁の歴史的経験を真剣かつ厳粛に分析し、総括するのではまったくなく、敵にたいする方法でスターリンに対処し、すべての誤りをみなスターリン一人におしつけた。

フルシチョフは秘密報告のなかでたくさんのウソをデッチあげ、あくどい扇動的な言葉をつかって、スターリンのことを「迫害狂」だとか、「冷酷な専制」だとか、「大がかりな迫害の道へふみだし、テロの道へふみだした」とか、「国内の状況や農業を映画でしか研究しなかった」とか、「地球儀を相手に作戦計画をねった」とか、スターリンの指導は「ソビエト社会発展途上の

重大な障害となった」などと攻撃した。フルシチョフは、スターリンがソ連人民をみちびいて国内外のすべての敵とだんこたる闘争をすすめ、社会主義的改造と社会主義建設の偉大な成果をおさめた功績をまったく抹殺しており、スターリンがソ連人民をみちびいて、世界で最初の社会主義国をまもり、うちかため、反ファッショ戦争の偉大な勝利をかちとった功績を抹殺しており、また、スターリンがマルクス・レーニン主義をまもり、発展させた功績を抹殺している。

フルシチョフがソ連共産党第二十回大会でスターリンを全面的に否定したことは、実質的には、プロレタリアート独裁を否定するものであり、スターリンがまもり、発展させたマルクス・レーニン主義の基本的原理を否定するものである。ほかならぬこの大会の席上、フルシチョフはその総括報告のなかで、一連の原則的な問題についてマルクス・レーニン主義を裏切りはじめたのである。

フルシチョフは、ソ連共産党第二十回大会の総括報告で、世界の状況が「根本的な変化」をきたしたという口実のもとに、いわゆる「平和移行」の論点をうちだした。フルシチョフは、十月革命の道は「当時の歴史的条件のもとでは」「唯一の正しい道であった」が、いまでは状況がかわり、「議会の道を通って」資本主義から社会主義へ移行する可能性がある、といっている。こうしたあやまった論点は、実質的にはマルクス・レーニン主義の国家と革命についての学説を公

然と修正し、十月革命の道の普遍的意義を公然と否定したものである。

フルシチョフはまた、その総括報告で、世界の状況はすでに「根本的な変化」をきたしたということを口実に、レーニン主義の帝国主義についての原理、戦争と平和についての原理がひきつづき有効であるかどうかという問題をだしたが、これも実際にはレーニンの学説を書きかえたものである。

フルシチョフは、アメリカ政府とその首脳者を帝国主義戦争勢力の代表者ではなく、戦争勢力に抵抗している人物とみなしている。フルシチョフは「アメリカでは戦争の方式で未解決の問題を解決するよう主張するものが、まだ有力な地位をしめており、かれらはいまなお大統領と政府に大きな圧力をかけている」とのべている。フルシチョフはまた、帝国主義者が力の立場の政策はすでに破綻したことを認めはじめており、「いくらか冷静なきざし」がかれらの間に「現れている」とのべている。つまり、アメリカ政府とその首脳者は、アメリカの独占ブルジョアジーの利益を代表しないことがありうるし、侵略政策と戦争政策を放棄することがありうる、かれらは平和をまもる勢力になった、というのである。

フルシチョフは、「平和と各国人民の安全のための闘争の面で、また経済と文化の面で、われわれはアメリカと友好的に協力したいと願っている」と言明している。ほかでもなくこうしたま

ちがった観点が、そのご「ソ連とアメリカが協力して世界の問題を解決する」という路線に発展していったのである。

フルシチョフは、社会制度の異なる国ぐにの平和共存についてのレーニンの正しい原則をねじまげて、平和共存はソ連の「対外政策の総路線」であるといっている。これはつまり、社会主義諸国のあいだの相互援助と協力も、各国の被抑圧人民、被抑圧民族の革命闘争にたいする社会主義国の支援も、すべて社会主義国の対外政策の総路線から除外してしまうか、あるいはこれらすべてをかれらのいわゆる「平和共存」の政策に従属させてしまうものである。

ソ連共産党指導部がソ連共産党第二十回大会で提起した一連の問題、とりわけスターリンについての問題といわゆる「平和移行」の問題は、けっしてソ連共産党一党の内部問題ではなくて、各国の兄弟党にかかわりのある共通の重要な問題である。ソ連共産党指導部は、事前に兄弟党の意見をすこしも求めようとせず、独断的に結論をくだし、兄弟党に既成の事実をうけいれるよう強要し、またいわゆる「個人迷信反対」を口実として乱暴にも、兄弟党、兄弟国の内政に干渉し、かれらの指導部を転覆させ、国際共産主義運動のなかで自己のセクト主義と分裂主義の政策をおしすすめた。

そのごの事実の発展からはっきりと見てとることができるように、ソ連共産党の指導者がマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を裏切り、これをみだりに変えたのは、ほかでもなくうえにのべたような誤りから発展してきたものである。

ソ連共産党第二十回大会にたいし、中国共産党は一貫して原則的にちがった意見をもっているが、このことはソ連共産党の指導的な同志がよく知っているとおりである。ところが、ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、中国共産党はいぜんソ連共産党第二十回大会を全面的に支持したといい、われわれのソ連共産党第二十回大会にたいする評価は「百八十度の転換をきたした」といい、われわれの立場は「ふらふら動揺している」とか、「虚偽的」であるとかといっている。

ソ連共産党指導部が、一手で天をさえぎろうとしても、できるものではない。やはり、事実をして語らしめようではないか。

事実はこうである。中国共産党中央委員会の指導的な同志は、ソ連共産党第二十回大会いご、内部的な話し合いのなかで、ソ連共産党指導部の誤りをいく度も厳粛に批判してきた。

一九五六年四月、ソ連共産党第二十回大会ののち二ヵ月もたたないときに、毛沢東同志は、ソ連共産党中央委員会幹部会員ミコヤン同志、中国駐在ソ連大使とあい前後して談話をおこない、スターリン問題にたいするわれわれの意見をのべた。毛沢東同志は、スターリン

は「過失よりも功績の方が大きいこと」、スターリンにたいしては「具体的に分析すべき」であり、「全面的に評価すべき」であることを強く指摘した。

一九五六年十月二十三日、毛沢東同志は中国駐在ソ連大使と会見したさい、「スターリンは批判する必要がある、だが、批判の方法については、われわれはちがった意見をもっている。また、いくつかの問題では、われわれは同意できない」と指摘した。

一九五六年十一月三十日、毛沢東同志は中国駐在ソ連大使と会見した際にも、スターリンが政権を担当していた期間の基本方針と路線は正しいものであったこと、また敵にたいする方法で自分の同志に対してはならないことを指摘した。

劉少奇同志が一九五六年十月にソ連共産党の指導者とおこなった談話、周恩来同志が一九五六年十月一日に当時中国共産党第八回大会に出席していたソ連共産党代表団との談話、周恩来同志が一九五七年一月十八日にソ連共産党の指導者とおこなった談話も、すべて一再ならずスターリン問題にたいするわれわれの意見をのべ、ソ連共産党の指導者の誤りを批判した。これらの誤りは、主として、スターリンにたいし「全面的な分析がまったくなされていないこと」、ソ連共産党の指導者が「自己批判にかけていること」、「事前に兄弟党と相談しなかったこと」である。

平和移行の問題についても、中国共産党中央委員会の指導的な同志は、ソ連共産党の同志との内部的な話し合いで、われわれのちがった意見を出した。一九五七年十一月、中国共産党中央委員会はまた、ソ連共産党中央委員会に書面で「平和移行の問題にかんする意見の要綱」をだし、中国共産党の観点を全面的に解明した。

中国共産党中央委員会の指導的な同志は、ソ連共産党の同志といく度も内部的な話し合いをおこなったさい、ソ連共産党第二十回大会の誤りに焦点をあわせて、国際情勢と国際共産主義運動の戦略問題についてのわれわれの観点を体系的にあきらかにした。

これらはすべて、ひじょうにはっきりした事実である。ソ連共産党指導部はどうしてぬけぬけとでたらめをいい、頭からこれを抹殺することができるであろうか。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、これらの重要な事実をおおいかくし、毛沢東同志、劉少奇同志、鄧小平同志のある公開演説のなかから自分に都合のよいところだけを抜きとってきて、中国共産党がかつてソ連共産党第二十回大会を全面的に肯定したことがあると証明しようとしているが、これはまったくムダ骨折りである。

じじつ、中国共産党はいついかなるばあいにも、ソ連共産党第二十回大会を全面的に肯定した

ことはなかったし、スターリンを全面的に否定することに同意したこともなかった。また、いわゆる「議会の道」を通って平和的に社会主義へ移行するという観点に同意したこともなかった。

われわれは、ソ連共産党第二十回大会後まもなく、一九五六年四月五日に「プロレタリアート独裁の歴史的経験について」を発表し、その後また一九五六年十二月二十九日に「ふたたびプロレタリアート独裁の歴史的経験について」を発表した。この二つの論文は、帝国主義と反動派の反共的なデマを反駁すると同時に、スターリンの生涯を全面的に分析し、十月革命の道の普遍的な意義を確認し、プロレタリアート独裁の歴史的経験を総括して、ソ連共産党第二十回大会のあやまった論点を婉曲に、だが、ひじょうにはっきりと批判した。このことが周知の事実ではないとでもいうのであろうか。

中国共産党はソ連共産党第二十回大会のあと、ひきつづき一貫してスターリンの肖像をマルクス、エンゲルス、レーニンというこれらの偉大な革命の指導者の肖像とともにかかげてきた。このこともまた、周知の事実ではないとでもいうのであろうか。

もちろん、指摘しなければならないことは、当時われわれは、帝国主義と各国の反動派が、ソ連共産党第二十回大会の誤りを利用して反ソ、反共、反人民の気ちがいじみた活動をすすめていたことを考慮にいれて、団結して敵にあたるため、ソ連共産党の指導者の困難な立場を配慮するため、また、ソ連共産党指導部があのときマルクス・レーニン主義にそむいてはいても、その後に見られるようにはまだ遠く離れ去ってはいなかったため、われわれは、ソ連共産党第二十回大会の誤りを公然と批判することはしなかった。当時、われわれは満腔の熱情をいだき、ソ連共産党指導部が誤りを改めることを希望していた。だから、われわれはあくまでも、その積極的な要因をさがし出すようにつとめ、公開の場所では適当な必要な支持をあたえていた。

とはいえ、中国共産党中央委員会の指導的な同志は、公開的な演説のなかで、主として、正面から、原則の上から、ソ連共産党第二十回大会にたいするわれわれの立場をあきらかにしてきた。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、劉少奇同志が中国共産党第八回大会の政治報告のなかで、ソ連共産党第二十回大会を全面的に肯定したといっている。だが、ほかでもなくこの報告のなかで、劉少奇同志は中国革命の経験をのべ、いわゆる「平和移行」の道は誤りであって、実行できるものではないことを説明したのであった。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、鄧小平同志が中国共産党第八回大会でおこなった党規約改正についての報告のなかで、ソ連共産党第二十回大会のいわゆる「個人迷信反対」のやり方を

全面的に肯定したといっている。だが、ほかでもなくこの報告のなかで、鄧小平同志は、党の民主集中制の問題や、指導者と大衆の相互関係の問題をくわしく論じ、また、われわれの党の一貫した正しい作風について説明したのであった。事実上、これはソ連共産党第二十回大会のいわゆる「個人迷信反対」の誤りを批判したのであった。

われわれがこのようにしたのは、どこがまちがっているというのだろうか。これこそ、マルクス・レーニン主義政党が当然とるべき、原則を堅持し、団結を堅持する態度でなくてなんであろうか。

ソ連共産党第二十回大会にたいする中国共産党のこのような一貫した正しい立場が「ふらふら動揺している」とか、「虚偽的」であるとか、「百八十度の転換」であるなどと、どうしていえるだろうか。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡がわれわれをこのように非難したのは、おそらくかれらが、過去のわれわれの批判はソ連共産党の少数の指導者しか知らないからシラを切ることができ、ウソをいって広はんなソ連共産党員とソ連人民を欺くことができると思っているのであろう。だが、こうしたやり方は、ほかでもなく、かれら自身こそ虚偽的であることを証明しているのではないだろうか。

ソ連共産党第二十回大会がもたらした重大な結果

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、ソ連共産党第二十回大会が「すばらしい結果」をうみだし、「偉大な結果」をうみだしたと、やっきになって吹聴している。

だが、歴史は書き変えられるものではない。ソ連共産党第二十回大会の誤りが、なんら「すばらしい結果」や「偉大な結果」をもたらさなかったばかりか、ソ連の名声をけがし、プロレタリアート独裁の名声をけがし、社会主義と共産主義の名声をけがして、帝国主義、反動派および共産主義のすべての敵に乗ぜられるスキをあたえ、国際共産主義運動にきわめて重大なわるい結果をもたらしたこと、健忘症でないかぎり誰でもおぼえているであろう。

当時、帝国主義と各国の反動派はおおいに気炎をあげ、全世界に反ソ、反共、反人民の波をまきおこした。アメリカ帝国主義は、ソ連共産党指導部が大々的にスターリンに反対したことを「これまでになくわれわれの目的にかなった」ふるまいだとみなし、フルシチョフの秘密報告を「共産党の運動の権威と影響をぶちこわす武器として」利用するとわめきたて、これを機にソ連

のいわゆる「平和的変革」を促進するのだとさかんにはやしたてた。

当時、チトー一味はたいへんな見幕だった。かれらは、いわゆる「スターリン主義反対」の反動的なスローガンをかかげて、プロレタリアート独裁と社会主義制度に、気違いじみた攻撃をくわえてきた。ソ連共産党第二十回大会はユーゴスラビアではじまったいわゆる「新しい趨勢のため」に、「かなり多くの要因をつくりだした」、「いまの問題は、この路線が勝つか、それともスターリン主義の路線がふたたび勝つかである」――かれらはこのようにわめきたてた。

当時、絶望状態にあった共産主義の敵――トロツキストは、大いに活気づいた。いわゆる第四インターは、その「全世界の労働者と人民へのよびかけ」のなかで、「クレムリン宮の指導者がみずからスターリンの罪悪をみとめたとき、かれらは……世界のトロツキズム運動が労働者国家の堕落に反対してすすめている不撓不屈のたたかいがまったく正しいことを黙認したのだ」とわめきたてた。

ソ連共産党第二十回大会の誤りは国際共産主義の隊列にきわめて大きな思想的混乱をひきおこし、修正主義思潮を大いに氾濫させた。多くの国の共産党では、いちぶの裏切り者が帝国主義、反動派、チトー一味と一しょになって、マルクス・レーニン主義に攻撃をくわえ、国際共産主義運動に攻撃をくわえてきた。

この期間に発生したもっともきわだった事件は、ソ連・ポーランド関係の事件とハンガリーの反革命暴動事件である。この二つの事件はちがった性格のものである。ソ連共産党指導部はこの二つの事件にたいして、どちらも重大な誤りをおかした。ソ連共産党指導部は、軍隊を出動させて、武力でポーランドの同志をおさえ、したがわせようとし、大国排外主義の誤りをおかした。ソ連共産党指導部は、一時ハンガリーの反革命勢力がブダペストを占領したその重大なせとぎわに降伏主義の政策をとり、社会主義のハンガリーを反革命の側になげすてようとした。

ソ連共産党指導部のこうした誤りによって、共産主義のすべての敵はたけり狂い、多くの兄弟党に重大な困難をもたらし、国際共産主義運動に重大な損害をもたらした。

こうした情勢に直面して、中国の共産主義者は、マルクス・レーニン主義を堅持する各国の兄弟党とともに、帝国主義と反動派の攻撃を撃退し、社会主義陣営と国際共産主義運動を守ることをだんこ主張した。当時、われわれは、すべての必要な措置をこうじてハンガリーの反革命暴動を粉砕することをだんこ主張し、社会主義のハンガリーをなげすてることにだんこ反対した。われわれは、正しい原則にのっとって兄弟党、兄弟国の間の問題を処理し、社会主義陣営の団結をかためることをだんこ主張し、大国排外主義のあやまったやり方にだんこ反対した。同時に、

われわれは、きわめて大きな努力をはらってソ連共産党の権威をまもった。

当時、ソ連共産党指導部はわれわれの提案をいれ、一九五六年十月三十日、ソ連政府が「ソ連とその他の社会主義国との友情と協力の基礎を発展させ、いっそう強めることについての宣言」を発表し、兄弟国の関係を処理する面でかれらのおかした若干の誤りを反省した。十一月一日、中国政府は声明をだしてソ連政府の宣言を支持するむね表明した。

われわれがこのようにしたのは、国際共産主義運動の利益のためであり、またソ連共産党指導部がただちに教訓をくみとって、誤りをただし、マルクス・レーニン主義から横道に深入りしないよう、勧告するためであった。ところが、ソ連共産党指導部は逆にわれわれに恨みをいだき、プロレタリア国際主義をかたくまもっている中国共産党を、かれらがあやまった路線をおしすすめるうえでの最大の障害とみなすようになったことを、そのご事実はものがたっている。

一九五七年の兄弟党のモスクワ会議

一九五七年の各国共産党・労働者党代表者モスクワ会議は、帝国主義と各国反動派の国際共産主義運動にたいするはげしい攻撃を撃退したあとで開かれたものである。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、ソ連共産党第二十回大会が国際共産主義運動の総路線をさだめる面で、「きわめて大きな役割」を果たしたといっている。事実は、まったく反対である。一九五七年の兄弟党会議はまさしく、多くの重大な原則的問題で、ソ連共産党第二十回大会のあやまった観点を拒否し、またこれをただした。

モスクワ会議で採択された名高い一九五七年の宣言は、国際共産主義運動の経験を総括し、各国共産党の共通した闘争任務を提起し、十月革命の道の普遍的な意義を確認し、社会主義革命と社会主義建設の共通の法則を概括し、兄弟党、兄弟国の関係の準則を規定した。この会議でさだめた国際共産主義運動の共同路線は、マルクス・レーニン主義の革命の原則をあらわしており、ソ連共産党第二十回大会で提起された、マルクス・レーニン主義にそむくあやまった観点と対立するものである。宣言で規定されている兄弟党、兄弟国の関係の準則は、プロレタリア国際主義の原則をあらわしており、ソ連共産党指導部の大国排外主義、セクト主義と対立するものである。

毛沢東同志がみずから団長となった中国共産党代表団は、会議の期間に一連の活動をおこなった。中国共産党代表団は、一方ではソ連共産党指導部と十分に話しあい、かれらにたいして必要

な適切な闘争をおこない、かれらが自分の誤りを改めるのをたすけ、他方ではまた他の兄弟党の指導者とくりかえし意見を交換しあい、みんながうけ入れることのできる共同の文書をまとめることにつとめた。

この会議でわれわれがソ連共産党代表団と論争したのは、主として資本主義から社会主義への移行についての問題であった。ソ連共産党指導部は、かれらが最初にだした宣言草案のなかに、ソ連共産党第二十回大会の平和移行についてのあやまった観点をむりやりにおしこもうとしていた。この草案は平和移行を提起しているだけで、非平和的移行にはまったくふれておらず、しかも平和移行は「議会のなかで多数をかちとり、議会をブルジョア独裁の道具から真の人民の権力の道具にかえる」ことだとしていた。これは、実際には、第二インターの日和見主義者のいわゆる「議会の道」を、十月革命の道にとってかわらせ、国家と革命についてのマルクス・レーニン主義の基本原理を書き変えたものである。

中国共産党は、ソ連共産党指導部の提出した宣言草案のあやまった観点にだんこ反対した。われわれは、ソ連共産党中央委員会が前後二回にわたって提出した宣言草案にたいして、自分の意見を出し、かなり多くの原則的な重大な改正をくわえたうえで自分の修正草案を提出した。そのご、中ソ両党の代表団はわれわれの修正草案の基礎にもとづいて何度も討議をかさね、そのうえで、「ソ連共産党と中国共産党の共同起草による宣言草案」を提出して、他の兄弟党代表団の意見をもとめた。

中国共産党代表団と他の兄弟党代表団の共同の努力によって会議が最後に採択した宣言は、資本主義から社会主義への移行の問題で、ソ連共産党指導部が最初に提出した草案とくらべ、二つの重大な改正がなされている。第一は、平和移行の可能性を指摘すると同時に、非平和的移行の道をも指摘しており、さらに「レーニン主義が教えているように、また歴史の経験が証明しているように、支配階級はみずからすすんで権力をゆずりわたすことはない」ということを強調している。第二は、「議会で安定した多数」をかちとることに言及すると同時に、「議会外の広はんな大衆闘争をくりひろげて、反動勢力の抵抗を粉砕して、社会主義革命を平和のうちに実現するために必要な条件をととのえること」を強調していることである。

以上のような改正がなされたとはいえ、資本主義から社会主義への移行の問題についての宣言の表現にたいしては、われわれはやはり不満であった。ただ、ソ連共産党第二十回大会の定式とつじつまをあわせることができるようにという希望をソ連共産党指導部が一再ならずだしていることを考慮して、われわれもついに譲歩したのである。

しかし、当時、われわれはソ連共産党中央委員会にたいして、平和移行の問題にかんする意見

の要綱をだし、この問題についての中国共産党の観点を全面的に解明した。この要綱はつぎの点を強調している。

「当面の国際共産主義運動の状況では、戦術的観点から出発して、平和移行の願望を提起することは有益なことである、だが、平和移行の可能性を強調しすぎることは妥当でない」。「いつでも反革命の襲撃をむかえ打つ用意をし、労働者階級が権力を奪取する革命の緊急のさい、もしもブルジョアジーが武力で人民の革命を弾圧してくるなら（総じてこれは必然的なものである）、武力でそれを打ち倒す用意をしておかなければならない」。「議会で多数をしめても、けつしてふるい国家機構（主として武力）の粉砕、新しい国家機構（主として武力）の樹立ということにはならない。もしもブルジョアジーの軍事的官僚的国家機構が粉砕されていなければ、プロレタリアートとその信頼できる同盟者が議会で多数を占めることは、不可能であるか」、「あるいはあてにならないことである」。（付録一参照）

中国共産党代表団と他の兄弟党代表団の共同の努力によって、一九五七年の宣言はまた、ソ連共産党指導部がソ連共産党第二十回大会で提起した帝国主義の問題や戦争と平和の問題などのあ

やまった観点を是正するとともに、一連の原則的な問題で多くの重要な内容をもりこみ、あるいは補足した。そのうちの主なものは、アメリカ帝国主義は全世界の反動勢力の中心であり、人民大衆のもっとも凶悪な敵であること。帝国主義はもしも世界戦争をひきおこすならかならず滅亡の運命におちいること。社会主義革命と社会主義建設の共通の法則。マルクス・レーニン主義の普遍的な真理を各国の革命と建設の具体的な実践に結びつけるという原則。実際の仕事のなかで弁証法的唯物論を運用することの重要性。労働者階級にとって、権力の獲得は、革命のはじまりにすぎず、革命が完成したことではないこと。資本主義と社会主義のどちらがどちらに勝つかという問題を解決するには、かなり長い期間が必要であること。ブルジョアジーの影響があることが修正主義の国内的な根源であり、帝国主義の圧力に屈服することがその国外的な根源であることなどである。

同時に、中国共産党代表団は必要な妥協をおこなった。平和移行の問題についての定式のほか、ソ連共産党第二十回大会にかんするあの部分の書き方も、われわれの同意できないものであり、改正の意見をだした。しかし、われわれはソ連共産党指導部の当時の困難な立場を考慮にいれて、この部分の書き方の改正を強いて要求しなかった。

われわれのこうした大局を考慮した譲歩が、こともあろうに、ソ連共産党指導部のために国際

共産主義運動の意見の相違を深め、分裂をつくりだす口実にされようとは、誰も思いもよらないことであった。

いま、ソ連共産党中央委員会の公開書簡はしきりに、ソ連共産党第二十回大会の決議を一九五七年の宣言と同等に扱い、ソ連共産党第二十回大会のあやまった路線を国際共産主義運動の共同路線にとってかわらせようとしている。われわれはずっと前に言ったことがあるが、いまもう一度指摘する必要がある。すなわち、兄弟党の独立、平等の原則によれば、他の兄弟党に、一兄弟党の大会の決議や、その他のどのようなものをもおしつける権利は誰ももっていない。どの党のどの大会の決議であろうと、国際共産主義運動の共同路線にすることはできないし、他の兄弟党に対して拘束力はない。われわれとすべての兄弟党にたいして拘束力をもつ共同行動の準則は、ただマルクス・レーニン主義だけであり、兄弟党が一致してとりきめた文書だけである。

ソ連共産党指導部の修正主義の発展

一九五七年のモスクワ会議ののちは、各国兄弟党の一致してとりきめた宣言があるので、もと

もと、われわれは、ソ連共産党指導部がこの宣言の路線にしたがい、自分の誤りを改めるようのぞんでいた。だが不幸なことには、われわれの願いに反し、またすべてのマルクス・レーニン主義的な兄弟党の願いに反して、ソ連共産党指導部がますますひどく宣言の革命的な原則にそむき、兄弟党、兄弟国の関係の準則にそむき、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の軌道からますます遠ざかっていったことである。ソ連共産党指導部の修正主義はあらたな発展をみせた。これにともなって、国際共産主義運動における意見の相違はいよいよはげしくなり、あらたな段階に発展した。

ソ連共産党指導部は、アメリカ帝国主義が全世界人民の敵であるという一九五七年の宣言の共同の結論をまったく無視して、アメリカ帝国主義との協力をもとめ、ソ米両国の首脳者による世界的問題の解決をもとめることに憂き身をやつした。とりわけ、一九五九年九月のキャンプ・デービッド会談の前後、フルシチョフはアイゼンハワーをそれこそ天までもちあげ、アイゼンハワーのことを「自国人民から絶対に信頼されている人物」で、「われわれと同じように平和を保障することに心をくだいている」と言った。ソ連共産党の同志はまた、アイゼンハワーさえ認めていない「キャンプ・デービッド精神」なるものをさかんに吹聴し、これは「国際関係の新しい紀元」だとか、「歴史の転換点」だとか言った。

ソ連共産党指導部は、一九五七年の宣言の革命的路線をまったく無視し、フルシチョフの言論やソ連の新聞雑誌の文章で、かれらのいわゆる「平和共存」、「平和競争」、「平和移行」の修正主義的路線をさかんに宣伝し、「帝国主義の賢明さ」や「善意」を宣伝し、帝国主義がまだ世界の大部分の地域を支配し制圧している状況のもとでも「兵器もなく、軍隊もなく、戦争もない世界」を実現できると宣伝し、全面的完全軍縮で「アジア、アフリカ、ラテンアメリカの経済発展にまったく新しい紀元を切りひらくことができる」などと宣伝した。

ソ連共産党はまた、多くの著作を出版し、多くの文章を発表して、哲学、政治経済学、社会主義と共産主義の学説、歴史、文学芸術などの各分野で、一連の重要な原則問題についてマルクス・レーニン主義の基本原理を書きかえ、その革命的な魂を骨抜きにし、かれらの修正主義的観点を宣伝した。

ソ連共産党指導部は、自己の一連のあやまった観点を民主的な国際組織におしつけ、これらの国際組織の正しい路線を変えさせようとはかった。一九六〇年六月に北京で開かれた世界労連理事会でのソ連同志のやり方はそのいちじるしい一例である。

ソ連共産党指導部は、一九五七年の宣言にきめられた兄弟党、兄弟国の関係についての準則をまったく無視して、あらゆる方法でアメリカ帝国主義のきげんをとると同時に、ほしいままに中国反対の活動をすすめた。ソ連共産党指導部は、マルクス・レーニン主義を堅持する中国共産党を、かれらが修正主義的路線をおしすすめるうえでの障害と見なした。かれらは、自分たちの内部的問題はすでに解決した、かれら自身の地位はもう「安定」した、「敵にはおだやかで友にはつらくあたる」かれらの政策の遂行に拍車をかけることができるようになった、と考えた。

一九五八年、ソ連共産党指導部は軍事面から中国を制しようとする理不尽な要求をだしたが、中国政府の正当なだんこたる拒絶にあった。そのごまもなく、一九五九年六月、ソ連政府は、中ソ双方が一九五七年十月に調印した国防の新技術についての協定を一方的に破棄し、中国に原子爆弾の見本と、原子爆弾を生産する技術資料を提供することを拒否した。

つづいて、フルシチョフのアメリカ訪問の直前、ソ連共産党指導部は、中国側が何回もだしたちがった意見を無視して、とるものもとりあえず、九月九日に中印辺境事件についてのタス通信の声明を発表し、インド反動派の肩をもった。こうして、ソ連共産党指導部は、中ソの意見の相違を全世界の前に公然とバクロした。

ソ連共産党指導部が国防の新技術についての協定を破棄し、中印辺境の衝突についての声明をだしたのは、フルシチョフのアメリカ訪問を前にして、アメリカ帝国主義のきげんをとり「キャンプ・デービッド精神」なるものをつくりだして、アイゼンハワーへの手土産にするためであった。

ソ連共産党の指導者と新聞雑誌はまた、中国共産党の国内政策と対外政策にたいして大量のあくどい攻撃をくわえてきた。こうした攻撃は、ほとんどそのたびごとにフルシチョフが先に立っておこなったものである。フルシチョフは、中国の社会主義建設が「段階をとびこえたもの」だとか、「平均共産主義」だとかと遠まわしに攻撃し、中国の人民公社は「実際には反動的なものだ」と攻撃した。かれは、中国を好戦的だとか、「冒険主義」をおかしたなどと遠まわしに攻撃した。かれは、キャンプ・デービッド会談から帰ったのち、あろうことか、アメリカの「二つの中国」の計画を中国に売りこむとともに、中華人民共和国成立十周年を祝う宴会の席上、「資本主義制度の安定性を武力に訴えてためしてはならない」などと中国にお説教をした。

ソ連共産党指導部のおしすすめた修正主義と分裂主義の路線は、国際共産主義の隊列に重大な混乱をまきおこした。アメリカ帝国主義がもう世界人民のもっとも凶悪な敵ではなくなったかのように、アイゼンハワーはいちぶの共産主義者から「平和の使者」として歓迎された。マルクス・レーニン主義と一九五七年の宣言は、もう時代おくれになったかのようであった。

こうした状況のもとで、中国共産党は、マルクス・レーニン主義をまもり、一九五七年の宣言をまもり、国際共産主義運動のなかの思想的混乱をはっきりさせるため、一九六〇年四月に「レーニン主義万歳」など三つの論文を発表した。この三つの論文では、われわれは原則を堅持し、

団結を堅持する一貫した立場にもとづいて、一九五七年の宣言の革命的観点を重点的に解明し、帝国主義、戦争と平和、またプロレタリア革命とプロレタリアート独裁についてのマルクス・レーニン主義の基本原理をのべた。この三つの論文の観点は、ソ連共産党指導部の宣伝している一連のあやまった観点とまったく対立するものである。しかし、当時、大局を考慮して、われわれはやはりソ連共産党の同志を公然と批判せず、闘争のほこ先を帝国主義者とユーゴスラビアの修正主義者にむけたのであった。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、「レーニン主義万歳」など三つの論文を極力ゆがめ、攻撃した、だが、かれらの攻撃を裏づけるような納得できる論拠は、なに一つあげることができなかった。われわれはたずねたい。当時の状況のもとで、われわれは一時流行したあやまった観点とでたらめな言論にたいし、沈黙をまもるべきだったとでもいうのだろうか。われわれにはたしてマルクス・レーニン主義をまもり、一九五七年の宣言をまもるために立ちあがる権利と義務がなかったとでもいうのだろうか。

ソ連共産党指導部の中国共産党にたいする不意打ち

「レーニン主義万歳」など三つの論文が発表されてから八日後に、アメリカのU2機がソ連の領空をおかし、アメリカが四カ国首脳会議を破壊するという事件がおこった。「キャンプ・デービッド精神」なるものは、完全にくずれてしまった。事態の発展は、われわれの論点がまったく正しいものであることを実証した。

大敵を前にして、中ソ両党、全世界の兄弟党が、意見の相違をなくし、団結をつよめ、共同して敵にあたることがさしせまって必要であった。ところが、事態は人びとの期待に反した。一九六〇年の夏、国際共産主義の隊列の意見の相違は、さらに大きくなり、大規模な中国共産党反対のカンパニアがおこり、ソ連共産党指導部が、中ソ両党の間のイデオロギーのくいちがいを国家関係の面にまでひろげたのである。

もともと、一九六〇年六月のはじめ、ソ連共産党中央委員会は、六月にルーマニア労働党の第三回大会が開かれる機会に、ブカレストで社会主義各国の共産党・労働者党の代表者会議を開き、アメリカが四カ国首脳会議を破壊したあとの国際情勢について意見を交換することを提起した。中国共産党はこうした会議をあわただしく開くことには賛成せず、社会主義各国の共産党・労働者党だけの代表者会議を開くことにも賛成しなかった。われわれは世界各国の共産党・労働者党の代表者会議を開くことを積極的に提案するとともに、この国際会議をりっぱに開くために

は十分な準備をととのえなくてはならないことを主張した。われわれのこの提案は、ソ連共産党の同意をえた。両党はまた、この国際会議を準備するためには、ルーマニア労働者党第三回大会に参加する兄弟党の代表が、この国際会議を開く日取りと場所について初歩的に意見を交換してもよいが、いかなる決定もおこなわない、ということに同意した。

われわれの予想に反し、ソ連共産党指導部は、こともあろうに、自分の約束にそむいて、もともとアメリカ帝国主義にむけるべき闘争のほこ先を中国共産党にむけ、ブカレストで中国共産党に不意打ちをくわえてきたのである。

兄弟党の代表のブカレスト会談は、六月二十四日から二十六日まで開かれた。ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、この会談のことを、中国共産党にたいして「同志的な援助」をおこなったなどと言っているが、これはまったくウソである。

実際には、会談の直前、フルシチョフをはじめとするソ連共産党代表団は、兄弟党の代表にそれぞれ中国共産党中央委員会にあてたソ連共産党中央委員会の六月二十一日づけの通知書を配布したり、読みあげたりした。この通知書は中国共産党にたいして全面的な、なんの根拠もない中傷や攻撃をくわえた。これはソ連共産党指導部の中国反対の綱領だったのである。

会談にさいし、フルシチョフは先頭にたって、中国共産党にたいする大がかりな包囲攻撃を組

織した。フルシチョフはその発言のなかで、中国共産党を「気違い」だとか、「戦争をおこそうとしている」とか、「帝国主義独占ブルジョアジーの旗を拾いあげた」とか、中国共産党は中印境界問題では「純粋な民族主義」であるとか、中国共産党はソ連共産党にたいして「トロツキーの方式」をとっているなどとほしいままに中傷をくわえた。フルシチョフの指揮にしたがっているいちぶの兄弟党の代表も、これにならって、中国共産党は「教条主義」だとか、「左翼冒険主義」だとか、「エセ革命」だとか、「セクト主義」だとか、「ユーゴスラビアよりもっと悪質」だとか大いに攻撃した。

フルシチョフがこの会談でおこした中国反対のカンパニアは、多くの兄弟党にとってもやはり一種の不意打ちであった。いちぶのマルクス・レーニン主義的な兄弟党の代表は、ソ連共産党指導部のこのようなあやまったやり方に同意しなかった。

この会談で、アルバニア労働党代表団は、ソ連共産党指導部の指揮棒にしたがわず、だんこソ連共産党指導部の分派活動に反対したので、ソ連共産党指導部は、アルバニア労働党を目のかたきにした。それいらい、かれらはますますはげしくアルバニア労働党に反対する活動をおこなった。

ソ連共産党指導部の中国共産党にたいするこのようなあくらつな攻撃は「同志的な援助」などと

いうことができるだろうか。いや、できない。これは、ソ連共産党指導部が事前にくわだてた中国反対の大がかりな演出だったのである。これは、一九五七年の宣言の兄弟党の関係についての準則を乱暴に破壊する重大な事件である。これは、ソ連共産党指導部に代表される修正主義者がマルクス・レーニン主義政党にたいしておこした大規模な攻撃である。

このような状況のもとで、中国共産党はマルクス・レーニン主義の陣地をまもり、宣言に規定されている兄弟党の関係の準則をまもるため、ソ連共産党指導部にたいしてまっ向から対決した闘争をおこなった。ブカレスト会談に出席した中国共産党代表団は大局を考慮して、会談コミュニケに調印すると同時に、中国共産党中央委員会の指示にもとづいて、一九六〇年六月二十六日、書面の声明を発表した。中国共産党代表団は声明のなかで、ブカレスト会談でのフルシチョフのやり方は、国際共産主義運動にきわめて悪い前例をつくったと指摘した。中国共産党代表団は、厳正につぎのように声明した。

「われわれは、マルクス・レーニン主義の一連の基本原則で、フルシチョフ同志との間に意見の相違がある」。「国際共産主義運動の運命は、各国人民の要求と闘争によって決まるものであり、マルクス・レーニン主義の指導によって決まるものであり、決して誰かの指揮

棒によつて決まるものではない」。「わが党はマルクス・レーニン主義の真理を信ずるだけであり、マルクス・レーニン主義にそむく誤つた観点には決して屈服するものでない」（付録二参照）

ソ連共産党指導部は、ブカレストで、中国共産党を屈服させることができなかったが、決してそれに甘んじなかった。ブカレスト会談の直後、ソ連共産党指導部は一連の措置をとって、中ソ両党の思想的なくいちがいを国家関係の面にまでひろげ、中国にさらに圧力をくわえたのである。

ソ連政府は七月に、中国にいるソ連の専門家を一カ月以内にぜんぶ引きあげることをとつぜん一方的にきめ、したがって、数百にのぼる協定と契約を破棄した。ソ連側はまた、雑誌『ドルージュバ』と雑誌『ソ中友好』を中ソ双方がたがいに出版し、互恵の条件で発行する協定を一方的に破棄し、中国政府にたいしてソ連駐在大使館員一名を自国に召還するよう不当に要求するとともに、中ソ辺境の紛争をひきおこした。

ソ連共産党指導部は、手にした指揮棒をふりあげ、用心棒どもをかきあつめて包囲攻撃をかけさえすれば、また政治的、経済的な、大きな圧力をかけさえすれば、中国共産党にマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の立場をすてさせ、かれらの修正主義と大国排外主義の意志におとなしく従わせることができると、考えていたようである。だが、長期の試練と鍛練をへてきた中国共産党と中国人民は、うちたおされるものではないし、おしつぶされるものでもない。包囲攻撃をかけ、圧力をくわえれば、われわれをひざまずかせることができるなどと夢みた者は、まったく見こみちがいをしてしまったのである。

ソ連共産党指導部が中ソ関係を破壊した真相については、われわれは、ほかの論文でくわしくのべるつもりである。ここでは、ただつぎの点だけを指摘しておこう。それはつまり、ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、中ソ関係にふれたさい、こともあろうに、ソ連政府が中国にいた専門家をぜんぶ引き揚げ、数百にのぼる協定と契約を一方的に破棄した事実をわざとおおいかくし、ほかでもなくソ連側のこうした一方的な行為が中ソ貿易の縮小をもたらしたことをおおいかくし、逆に、中国が思想的なくいちがいを国家関係の面にまでひろげたと非難し、中国が中ソ両国の貿易を縮小させたと非難していることがそれである。ソ連共産党指導部がこともあろうに、このようにあからさまに、ソ連共産党員とソ連人民を欺いていることこそ、真に悲しむべきことである。

一九六〇年の兄弟党会議での二つの路線の闘争

一九六〇年の下半期に、各国共産党・労働者党代表者会議の開催をめぐり、国際共産主義の隊列のなかでさらにはげしい闘争がくりひろげられた。この闘争は、マルクス・レーニン主義と修正主義という二つの路線の闘争であり、また、原則を堅持し、団結をまもるか、それとも原則をなげすて、分裂をつくりだすかという二つの方針の闘争でもあった。

兄弟党の会議が開かれるまえに、ソ連共産党指導部が自己のあやまった立場をあくまでもとりつづけ、自己のあやまった路線を国際共産主義運動におしつけようとするさまざまのきざしがみられた。

中国共産党は、意見の相違の深刻さをつよく感じた。われわれは、国際共産主義運動の利益のため多くの努力をはらい、ソ連共産党指導部があやまった道にあまり深入りしないよう、のぞんだ。

一九六〇年九月十日、中国共産党中央委員会は、ソ連共産党中央委員会の六月二十一日づけの

通知書に回答した。この回答書のなかで、中国共産党中央委員会は事実をあげ、道理を説くという態度で、国際情勢と国際共産主義運動の一連の重要な原則問題について体系的に自己の観点をあきらかにし、ソ連共産党指導部のわれわれにたいする攻撃に反駁をくわえ、ソ連共産党指導部のあやまった観点を批判するとともに、ソ連共産党中央委員会にたいして、意見の相違を解決し、団結に達するための五項目の積極的な提案をだした。（五項目の提案は付録三を参照）

つづいて、中国共産党中央委員会は、九月に代表団をモスクワに派遣し、ソ連共産党代表団と会談をおこなった。会談にさいし、中国共産党代表団は、ソ連共産党指導部が一方ではアメリカ帝国主義を美化し、他方ではほしいままに中国に反対し、両党の間の思想上のくいちがいを国家関係の面にまでひろげ、敵との関係と兄弟党、兄弟国との関係の位置をおきちがえていることを指摘した。中国共産党代表団は、ソ連共産党指導部がこうしたあやまった立場を改めて、兄弟党、兄弟国の関係の準則に戻り、中ソ両党両国の団結をつよめ、共同の敵に反対するよう、くりかえし勧告した。ところが、ソ連共産党指導部は、自己の誤りを改める意志がまったくなかったのである。

こうして、鋭い闘争がさけられなくなった。この闘争は、まず、二六の兄弟党の代表が参加した、兄弟党会議のための文書を準備する起草委員会でくりひろげられ、つづいて、八一の兄弟党

の代表者会議で、空前のはげしさに達したのである。

十月、モスクワで開かれた起草委員会で、ソ連共産党指導部は自己の起草した声明草案をむりやり採択させようとはかったが、この草案には、ソ連共産党指導部の一連のあやまった観点がふくまれていた。中国共産党や、他の一部の兄弟党の代表団が原則をかたくまもって闘争したため、起草委員会は、はげしい討論をへて、ソ連共産党のだした声明草案に多くの重要な原則的な改正をくわえた。起草委員会は、声明草案のほとんど大部分について話し合いをまとめた。ところが、ソ連共産党指導部は、論争をつづけようとはかり、声明草案のなかにのこされていたいくつかの重大な意見の相違の問題について話し合いをまとめることを拒み、さらに、フルシチョフがニューヨークから帰ったあとは、いちぶの問題についてすでにまとまっていた取り決めまでもくつがえしてしまったのである。

一九六〇年十一月、八一の兄弟党の代表者会議がモスクワで開かれた。ソ連共産党指導部は、意見の相違をなくし、団結をつよめたいという中国共産党やそのほか多くの兄弟党の代表団の願いを無視して、こともあろうに、会議の直前、中国共産党をいっそう乱暴に攻撃する、長さ六万語におよぶ書簡をモスクワに集まった兄弟党の代表に配布し、いっそう鋭い論争をひきおこした。

八一の兄弟党の代表者会議は、こうしたきわめて不正常なふんいきのなかで開かれたものであ

った。ソ連共産党指導部のあくどいやり方は、会議を決裂のせとぎわに追いやったのであった。中国共産党代表団と他のいちぶの兄弟党代表団が原則を堅持し、闘争を堅持したため、また大多数の兄弟党代表団が団結を求め、分裂に反対したため、会議はさいごにはやはり話し合いをまとめ、積極的な成果をおさめたのであった。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、中国共産党代表団は、この会議で「完全な孤立の脅威にさらされてはじめて声明に調印した」のだといっている。これもウソである。

事の真相はどうだったのだろうか。

ソ連共産党指導部が会議のまえに少なからぬ兄弟党の代表を組織して中国共産党を包囲攻撃したことはたしかであったし、いわゆる多数にたよって、中国共産党代表団と他のマルクス・レーニン主義的な兄弟党の代表団を屈服させようとしたこともたしかであった。また、これらの党の代表団にソ連共産党指導部の修正主義の路線と観点をむりやりにおしつけようとしたこともたしかであった。しかし、二六の兄弟党の起草委員会でも、八一の兄弟党の代表者会議でも、ソ連共産党指導部のおしつけがましいやり方はすべて失敗したのである。

事実、ソ連共産党指導部のだした声明草案の多くのあやまった論点が、みな否定されたのである。例をあげてみると、

平和共存と経済競争が社会主義諸国の対外政策の総路線であるというソ連共産党指導部のあやまった論点は否定された。

資本主義の全般的危機の新しい段階があらわれたのは平和共存と平和競争によるものだというソ連共産党指導部のあやまった論点は否定された。

平和移行の可能性がますます大きくなっているというソ連共産党指導部のあやまった論点は否定された。

社会主義諸国のいわゆる「ひとり仕事」に反対するということで、実際には社会主義諸国の自力更生を主にした建設方針に反対するソ連共産党指導部のあやまった論点は否定された。

国際共産主義運動のなかで、いわゆる「集団活動」と「分派活動」に反対するということで、実際には、兄弟党をソ連共産党指導部の指揮棒にしたがわせ、兄弟党の関係における独立、平等の原則を取り消し、話し合いで見解を統一するかわりに多数で少数を屈服させるというソ連共産党指導部のあやまった論点は否定された。

現代修正主義の重大な危険を過小評価するソ連共産党のあやまった論点は否定された。

事実、中国共産党代表団と他の兄弟党代表団がだした多くの重要な、原則的な正しい意見が声明に書きこまれたのである。声明のなかの帝国主義の本性は変わらないことについての論点、アメリカ帝国主義は全世界人民の敵であることについての論点、アメリカ帝国主義反対のもっとも広はんな統一戦線を結成することについての論点、民族解放運動は世界戦争を防止する重要な勢力であることについての論点、新しい独立国が民族民主革命を徹底的になしとげることについての論点、社会主義国と国際労働運動が民族解放闘争を支持することについての論点、アメリカ帝国主義に政治的、経済的、軍事的に支配されているいちぶの発達した資本主義国では、労働者階級と人民大衆の主な打撃はアメリカ帝国主義の支配にむけられ、民族の利益を売り渡す独占資本と国内のそのほかの反動勢力にむけられることについての論点、兄弟党が話し合いで見解を統一する原則、修正主義がマルクス・レーニン主義の革命の魂を骨抜きにすることに反対する論点、ユーゴスラビア共産主義者同盟の指導者がマルクス・レーニン主義を裏切ったことについての論点など、こうした論点はすべて中国共産党代表団や他のいちぶの兄弟党代表団の意見をとり入れたものである。

ソ連共産党指導部がかれらのあやまった論点を削除することに同意し、兄弟党の正しい意見をうけ入れたあと、中国共産党代表団や他のいちぶの兄弟党代表団も、いくらか譲歩したということ、このことにも、もちろん、ふれなければならない。たとえば、われわれは、ソ連共産党第二十回大会の問題、資本主義から社会主義への移行の形態の問題については、いずれもちがった意

見を持っている。われわれが声明のなかに、一九五七年の宣言のこの二つの問題についての文字をそのまま書き入れることに同意したのは、ソ連共産党やいちぶの兄弟党の必要を考慮してのことである。だが、当時、われわれは、ソ連共産党第二十回大会についての定式を大目に見るのは今度かぎりで、今後はけっして大目に見ないむね、ソ連共産党指導部につたえた。

以上の事実からわかるように、一九六〇年のモスクワ会議の全過程は、国際共産主義運動の二つの路線の闘争につらぬかれている。この会議にあらわれたソ連共産党指導部の誤りは、このまえの時期にくらべていっそうひどくなった。ソ連共産党指導部のだした声明草案と会議での発言からはっきり見てとることができるように、ソ連共産党指導部が兄弟党におしつけようとしたあやまった路線は、政治上ではかれらのいわゆる「平和共存」、「平和競争」、「平和移行」のあやまった観点を中心内容とし、組織上ではセクト主義、分裂主義のあやまった政策を実行することであった。これは、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義にまったくそむく修正主義の路線である。中国共産党と他のマルクス・レーニン主義的な兄弟党の代表団はこの路線にだんこ反対し、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の路線をだんこまもった。

この会議での闘争の結果は、ソ連共産党指導部の修正主義の路線と観点が基本的に否定され、マルクス・レーニン主義の路線が大きな勝利をおさめたことである。会議が採択した声明に体現

される革命的原則は、全世界の兄弟党が帝国主義に反対し、世界平和、民族解放、人民民主主義、社会主義をめざす闘争をすすめる有力な武器であり、また、各国のマルクス・レーニン主義者が現代修正主義反対の闘争をすすめる有力な武器である。

この会議で、マルクス・レーニン主義を堅持する兄弟党は、ソ連共産党指導部の一連のあやまった観点に厳粛な批判をくわえて、ソ連共産党指導部に兄弟党の多くの正しい意見をうけ入れざるをえなくさせた。これによって、ソ連共産党指導部の誤りにたいしては少しも批判してはならず、ソ連共産党指導部のいうことはそのまま通るというきわめて不正常な局面がうちやぶられた。これは国際共産主義運動における大きな歴史的意義をもつ事柄である。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、中国共産党代表団がこの会議で「完全に孤立した」立場に立たされたといっているが、これはソ連共産党指導部の負けおしみにすぎない。

この会議はさらに、兄弟党がたがいに連合し、また独立、平等でもあるという原則をあらわし、話し合いで見解を統一する原則をあらわし、ソ連共産党指導部が多数で少数を屈服させて、自己の意見を兄弟党におしつけようとするこのあやまったやりかたをうちやぶった。この会議は、マルクス・レーニン主義政党にとって、兄弟党の意見の相違を解決するばあい、原則を堅持し、闘争を堅持し、団結を堅持することがまったく必要であることをあらためて立証した。

ソ連共産党指導部の修正主義の体系化

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、「中国共産党の指導者が一九六〇年の声明に調印したのは、小手先をもてあそんだのにすぎない」と言っている。事実は、はたしてそうなのだろうか？いや、それはまったく逆である。小手先をもてあそんだのは、われわれではなくて、ソ連共産党の指導部であった。

一連の事実が示しているように、ソ連共産党指導部が一九六〇年の兄弟党会議で、かれらの声明草案のなかのあやまった論点を削除し改めることに同意したのは、やむをえずやったことであり、かれらが兄弟党の正しい論点をうけいれたのも、真意ではなかったのである。ソ連共産党指導部は、兄弟党が共同でとりきめた文書をまったく眼中においていなかった。一九六〇年の声明が調印され、署名の文字がまだかわかないうちに、ソ連共産党指導部は、その破壊に着手した。十二月一日、フルシチョフは、ソ連共産党中央委員会を代表して声明に調印したが、それから二十四時間後に、当のフルシチョフが、各国兄弟党代表団を招いた宴会の席上、兄弟党のとりきめ

にそむいて、ユーゴスラビアが社会主義国家であると大いにまくしたてている。

八一の兄弟党の会議のあと、ソ連共産党の指導部は一九五七年の宣言と一九六〇年の声明をますます勝手気ままに破壊した。ソ連共産党指導部は一方では、声明が全世界人民の敵だと宣言しているアメリカ帝国主義を友人あつかいにして、「米ソ協力」を鼓吹し、ケネディといっしょになって「信頼、相互理解、友宜のがっちりした橋をかけわたすことに着手する」などと表明するとともに、他方ではいちぶの兄弟党、兄弟国を敵とみなして、ソ連とアルバニアの関係を急激に悪化させた。

一九六一年十月におこなわれたソ連共産党第二十二回大会は、ソ連共産党指導部がマルクス・レーニン主義に反対し、社会主義陣営と国際共産主義運動を分裂させる一つの新しい頂点であった。これは、ソ連共産党指導部がソ連共産党第二十回大会からしだいに発展させてきたかれらじしんの修正主義が完全な体系をととのえたことをしめす里程標であった。

この大会で、ソ連共産党指導部はアルバニア労働党にたいして大がかりな公然たる攻撃をおこした。フルシチョフはその発言のなかで、ホッジャ同志とシェーフ同志の指導をくつがえすよう公然とよびかけた。こうして、ソ連共産党の指導者は一つの党の党大会を利用しておおっぴらに兄弟党を攻撃するというあくらつな前例をつくったのである。

この大会でソ連共産党指導部がしでかしたもう一つの大きな事柄は、スターリンの逝去八年後と、ソ連共産党第二十回大会がスターリンを全面的に否定した五年後に、ふたたび集中的にスターリン反対をおこなったことである。

ソ連共産党指導部がこのようにしたのは、とどのつまり、宣言と声明をなげすて、マルクス・レーニン主義に反対し、体系的な修正主義の路線をおしすすめるためであった。

ソ連共産党指導部の修正主義は、こんどの大会で採択されたソ連共産党の新しい綱領のなかに集約されている。

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、ソ連共産党第二十二回大会の路線を「各国共産党代表者会議で賛同をえたものであり、宣言と声明のなかに反映されたもの」だなどといっている。ソ連共産党指導部はこのように言って、あまりにも粗忽だとは思わないだろうか？　一九六一年におきた事柄を、一九六〇年、さらには一九五七年の各国共産党・労働者党代表者会議で「賛同をえた」とか、「反映された」などとどうして言えるだろうか？

ここでは、こうしたでたらめな自己宣伝については一応さておき、なによりもまずはっきりさせなければならないことは、むしろソ連共産党第二十二回大会で採択されたソ連共産党の綱領がいったいどのような代物であるかということである。

すこしでもまともにソ連共産党の綱領とフルシチョフの報告を検討してみるなら、ソ連共産党指導部の提起しているものが、マルクス・レーニン主義の基本的原理に根本的にそむき、宣言と声明の革命的原則に根本的にそむく徹頭徹尾の修正主義綱領であることは容易にわかる。

この綱領は、多くの重大な原則的問題で、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明にそむいている。一九六〇年の兄弟党会議で否定されたソ連共産党指導部の多くのまちがった観点は、またもやソ連共産党の綱領にあらわれた。たとえば、平和共存を対外政策の全般的な原則であるといい、平和移行の可能性を一面的に強調し、自力更生を主体とする社会主義国家の建設方針をいわゆる「ひとり仕事」だなどと中傷している。

この綱領は、ソ連共産党指導部がソ連共産党第二十回大会いらいとってきたあやまった路線をいっそう体系化したもので、その主な内容は、いわゆる「平和共存」、「平和競争」、「平和移行」にほかならない。

この綱領は、マルクス・レーニン主義の核心、つまり、プロレタリア革命とプロレタリアート独裁についての学説、プロレタリア政党についての学説に乱暴な修正をくわえ、プロレタリアート独裁がソ連ではすでに必要がなくなったと宣言し、ソ連共産党のプロレタリアートの前衛としての性質はすでに変わったと宣言し、いわゆる「全人民の国家」とか、「全人民の党」などとい

うでたらめな論点をもちだしている。

この綱領は、人道主義をマルクス・レーニン主義の階級闘争の学説にとってかわらせ、ブルジョアジーのいわゆる「自由」、「平等」、「博愛」のスローガンを共産主義の理想にとってかわらせている。

この綱領は、いまなお帝国主義と資本主義制度のもとにある、世界人口の三分の二を占める人民が革命をおしすすめるのに反対する綱領であり、すでに社会主義の道を歩んでいる、世界人口の三分の一を占める人民が革命をさいごまでおしすすめるのに反対する綱領であり、資本主義を温存し、復活させる修正主義の綱領である。

中国共産党はソ連共産党第二十二回大会の誤りにだんこ反対した。この大会にまねかれて出席した中国共産党代表団の団長周恩来同志は、そのあいさつのなかでわが党の立場をのべ、そのごフルシチョフその他のソ連共産党の指導者との会談でも、ソ連共産党指導部の誤りを率直に批判した。

中国共産党との会談にさいし、フルシチョフは中国共産党代表団の批判と勧告を全面的に拒否し、さらには中国共産党内の反党分子を支持することを、公然と表明さえした。フルシチョフは、ソ連共産党第二十回大会ののち、かれらが「スターリンと異なった道」を歩みはじめたとき、つまり修正主義の道を歩みはじめたときには、まだ兄弟党の支持が必要であった、と露骨に表明した。かれは、「当時、中国共産党の発言はわれわれにとってひじょうに大きな意義をもっていた」、「だが、いまはちがう」、「いまでは、われわれはうまくいっている」、「われわれは自分の道を歩むのだ」といった。

フルシチョフのこれらの言葉は、ソ連共産党指導部がすでに修正主義と分裂主義の道を歩みつづける決意をしたことを示している。中国共産党が再三再四にわたって同志的な忠告をおこなったにもかかわらず、かれらはまったく心にとめず、なんら反省の色も見せなかった。

マルクス・レーニン主義に反対し、国際共産主義運動を分裂させる逆流

ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、あたかもソ連共産党指導部がソ連共産党第二十二回大会いご、中ソ両党の関係の改善をはかり、兄弟党、兄弟国の団結の強化をはかるため「新たな努力をはらった」かのように、どうにかして人びとに信じこませようとしている。

これもまたウソである。

では、事実は一体どうなのだろうか？

事実は、ソ連共産党第二十二回大会いご、ソ連共産党指導部が自己のさだめた、マルクス・レーニン主義にまったくそむく体系的な修正主義の路線をおしすすめるため、兄弟党、兄弟国の関係の準則をいっそうはしいままに破壊し、大国排外主義、セクト主義、分裂主義の政策を実行したのである。このため、中ソ関係はますます悪化し、兄弟党、兄弟国の団結は重大な損害をこうむった。

つぎにあげるのは、ソ連共産党第二十二回大会いらい、ソ連共産党指導部が中ソの団結、兄弟党、兄弟国の団結を破壊した主な事実である。

第一、ソ連共産党指導部は自己のあやまった路線を国際共産主義運動にどうにかしておしつけようとし、自己の修正主義的綱領をどうにかして宣言と声明におきかえようとした。かれらは自己のあやまった路線を「国際共産主義運動の近年来のレーニン主義的方針の全体である」などと言い、自己の修正主義的綱領を「われわれの時代の真の共産党宣言」であり、「共産党・労働者党および社会主義の友好共同体の各国人民」の「共同綱領」であるなどといっている。

どの兄弟党にせよ、ソ連共産党のあやまった路線を受けいれないで、マルクス・レーニン主義の基本的原理を堅持し、宣言と声明の革命的原則を堅持するなら、ソ連共産党指導部はその兄弟

党を敵とみなし、あらゆる可能な手段にうったえて、それに反対し、攻撃し、損害をあたえ、その指導部をくつがえそうとした。

第二、ソ連共産党指導部はすべてをかえりみずに、兄弟党、兄弟国の関係で史上に例を見ない行動をとり、社会主義のアルバニアと外交関係を断絶した。

第三、ソ連共産党指導部はひきつづき中国に圧力をかけ、中国共産党にあくどい攻撃をくわえた。一九六二年二月二十二日、ソ連共産党中央委員会は、中国共産党中央委員会あての書簡のなかで、われわれのことを「特殊の立場」をとっているとか、兄弟党の共同の方針とちがった路線をとっているなどと非難するとともに、われわれがマルクス・レーニン主義のアルバニア労働党を支持していることさえを罪状の一つにかぞえたてた。ソ連共産党指導部はまた、中国共産党に無理やりマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の立場をすてさせ、中国共産党の一貫して堅持してきた宣言と声明にまったくかなった革命的原則の路線をすてさせて、ソ連共産党指導部のあやまった路線をうけ入れさせ、ソ連共産党指導部が兄弟党、兄弟国の関係の準則を破壊した既成事実をうけ入れさせて、これを中ソ関係改善の条件にしようとたくらんだ。ソ連共産党中央委員会の公開書簡は、この時期にソ連共産党中央委員会が中国共産党中央委員会におくった書簡や、一九六二年十月にフルシチョフが中国の駐ソ大使に団結しなければならないと話したこ

となどを吹聴しているが、その実、これらはすべて、この卑劣な目的をとげるためのものであった。

第四、ソ連共産党中央委員会は、各国兄弟党代表者会議開催についてのインドネシア、ベトナム、ニュージーランドなどの兄弟党の提案を拒否し、また中国共産党中央委員会が一九六二年四月七日、ソ連共産党中央委員会にあてた書簡のなかで、兄弟党会議開催の準備のために提案した五項目の積極的な提案をも拒否した。ソ連共産党中央委員会は一九六二年五月三十日、中国共産党中央委員会に返書をよせ、ソ連とアルバニアの関係を改善する前提条件として、また兄弟党会議開催の前提条件として、アルバニアの同志はかならず自分の立場を放棄しなければならないとさえ要求した。

第五、一九六二年四月から五月にかけて、ソ連共産党指導部は中国の新疆地方に駐在しているその機構と要員をつうじて、伊犂地区で大規模な転覆活動をおこない、数万人の中国の公民をおびきよせたり、脅迫したりしてソ連領内に引き入れた。中国政府が再三抗議し折衝したにもかかわらず、ソ連政府は「ソビエトの法制の感覚」とか「人道主義」とかという口実で、これらの中国の公民をおくりかえすことを拒否した。この事件はいまもって解決されていない。これは社会主義国家の関係でまったく前例のない驚くべきことである。

第六、一九六二年八月、ソ連政府は、ソ連はアメリカと核拡散防止についての協定をむすぶつ

もりであると、正式に中国に通知してきた。これは、ソ連とアメリカが共謀して核兵器を独占し、中国がアメリカの核威かくに抵抗するため核兵器をもつ権利を奪おうとくわだてたものである。中国政府はこれについて何回も抗議を提出した。

第七、ソ連共産党指導部はアメリカ帝国主義との政治的取り引きにますます熱中し、社会主義陣営と国際共産主義運動の利益を犠牲にすることをも辞さず、いちずにケネディと反動同盟をむすぼうとしている。ソ連共産党指導部がカリブ海の危機にさいして、アメリカ帝国主義の核恐喝に屈服し、アメリカ政府のもち出した、キューバの主権をおかす「国際査察」なるものをうけ入れ、降伏主義の誤りをおかしたことは、そのいちじるしい実例である。

第八、ソ連共産党指導部は、インドの反動派と結託することにますます熱中し、いちずにネールと反動同盟を結んで、社会主義の中国に反対しようとしている。ソ連共産党指導部とかれらの新聞雑誌は、公然とインド反動派の側にたって、中印辺境衝突での中国の正義の立場を非難し、ネール政府を弁護している。ソ連がインドにあたえた経済援助のうち、三分の二はインド反動派が中印辺境衝突をひきおこしたあとインドにあたえられたものである。ソ連共産党指導部は、一九六二年の秋中印辺境で大規模な武力衝突がおこってからでさえ、依然としてインド反動派に軍事援助をあたえている。

第九、ソ連共産党指導部は、ユーゴスラビアのチトー一味と結託することにますます熱中し、いちずに裏切り者チトーと反動同盟を結んで、すべてのマルクス・レーニン主義政党に反対しようとしている。ソ連共産党第二十二回大会いご、ソ連共産党指導部は一連の行動をとって、公然と一九六〇年の声明を破棄し、チトー一味の名誉回復をはかった。

第十、一九六二年十一月いらい、ソ連共産党指導部は国際的な範囲でいっそうはげしく中国共産党と他のマルクス・レーニン主義政党に反対し、社会主義陣営と国際共産主義運動を分裂させる新たな逆流をまきおこした。フルシチョフはつぎつぎに演説をおこない、ソ連の新聞雑誌はながながと数百編の文章を発表し、一連の問題について中国共産党を攻撃した。ソ連共産党指導者の指揮のもとに、ブルガリア、ハンガリー、チェコスロバキア、イタリア、ドイツ民主共和国の五つの兄弟党の党大会が中国反対の大公演の舞台に変わり、四〇余の兄弟党が決議や声明、文章を発表して、中国共産党と他のマルクス・レーニン主義政党を攻撃した。

以上にのべたこれらの事実は、ソ連共産党指導部の言いぬけることのできないものである。これらの動かすことのできない事実は、ソ連共産党第二十二回大会いごソ連共産党指導部のはらった「新たな努力」なるものが、中ソ関係を改善し、兄弟党、兄弟国の団結をはかるものではなく、逆に、アメリカ帝国主義やインド反動派および裏切り者チトー一味といっそう結

託し、一歩すすんで社会主義陣営と国際共産主義運動を分裂させるものであることを証明している。

このような重大な状況のもとで、中国共産党はいちぶの兄弟党の攻撃に公然と答えないわけにはいかなくなった。われわれは一九六二年十二月十五日から一九六三年三月八日までに、それに答える論文を七編発表した。これらの論文のなかで、われわれはなお余地をのこし、ソ連共産党指導部を公然と名指しては批判しなかった。

もともと、ソ連共産党指導部の誤りによって中ソ関係がひどく悪化したにもかかわらず、中国共産党はやはり代表団をモスクワに派遣して中ソ両党の会談をおこなうことに同意したし、また会談のさい系統的に意見を交換するため、ソ連共産党中央委員会にあてた六月十四日づけの書簡で国際共産主義運動の総路線についての提案をおこなった。

その後の事実が示しているように、ソ連共産党指導部は意見の相違をとりのぞき、団結を強めることに少しも誠意をみせなかったばかりか、中ソ両党の会談を、かれらが中ソ関係をいっそう悪化させるのをおおいかくす煙幕に利用した。

中ソ両党会談の直前、ソ連共産党指導部は、声明を発表したり、決議を採択したりする方法で、中国共産党を公然と名指しで攻撃するとともに、ソ連駐在の中国大使館員や研究生を理不尽

にも追放した。

中ソ両党の会談がおこなわれている最中の七月十四日、米英ソ三カ国会談が開かれる直前でもあるそのときに、ソ連共産党指導部は待ちきれないかのように各級党組織と全党員あてのソ連共産党中央委員会の公開書簡を発表し、さかんに中国共産党を攻撃した。これもまたソ連共産党指導部がアメリカ帝国主義者に取りいるためのいわゆる「貴重な」手土産であった。

つづいて、ソ連共産党指導部はソ連人民の利益を公然と売り渡し、中国人民をもふくむ社会主義陣営各国の利益を売り渡し、平和を愛する全世界人民の利益を売り渡して、米英両国とモスクワで部分的核実験停止条約をむすんだ。また、ソ連とインドのあいだの接触をひんぱんにおこなった。フルシチョフはユーゴスラビアへいわゆる「休暇」に出かけた。また、ソ連の新聞雑誌で気違いじみた中国反対のカンパニアをくりひろげた……こういった一連のできごとは、ソ連共産党指導部がすべてをかえりみず、帝国主義と連合し、各国反動派と連合し、裏切り者チトー一味と連合して、社会主義国の兄弟国に反対し、マルクス・レーニン主義の兄弟党に反対していることをはっきりしめしている。これはソ連共産党指導部の修正主義と分裂主義の路線を大々的に暴露したものである。

いま、帝国主義、各国反動派、修正主義者は「反中国大合唱」の怪気炎をあげている。フルシ

チョフの指導するマルクス・レーニン主義反対、社会主義と国際共産主義の隊列分裂のカンパニアは、いま、日一日とはげしくなっている。

七年来の事実は何を物語るか

われわれが以上に意見の相違の由来とその発展をくわしく回顧したのは、ソ連共産党中央委員会の公開書簡によってゆがめられた事実をはっきりさせ、われわれの党員とわが国の人民、そしてまた、全世界のマルクス・レーニン主義者と革命的な人民に真相を知らせるためである。

七年らいの事実があますところなく立証しているように、中ソ両党のあいだ、国際共産主義運動のなかに意見の相違がうまれたのは、ひとえにソ連共産党指導部がマルクス・レーニン主義を裏切り、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明の革命的原則を裏切り、国際共産主義運動のなかで修正主義、分裂主義の路線をおしすすめたことによるものである。ソ連共産党指導部が修正主義、分裂主義の道にますます深入りしていった過程は、意見の相違が発展し激化していった過程にほかならない。

七年らいの事実があますところなく立証しているように、当面の国際共産主義運動の意見の相違は、マルクス・レーニン主義の路線を堅持することと、修正主義の路線を固執することとの相違である。それは、革命の路線を堅持することと、非革命、反革命の路線を固執することとの相違である。それは、帝国主義反対の路線を堅持することと、帝国主義に降伏する路線を固執することとの相違である。それはまた、プロレタリア国際主義を堅持することと、大国排外主義、セクト主義、分裂主義を固執することとの相違である。

七年らいの事実があますところなく立証しているように、ソ連共産党指導部の歩んできた道は、帝国主義と連合して社会主義に反対し、アメリカと連合して中国に反対し、各国の反動派と連合して世界の人民に反対し、裏切り者チトー一味と連合してマルクス・レーニン主義の兄弟党に反対する道である。ソ連共産党指導部のこのあやまった路線は、国際的な範囲で修正主義の思潮を氾濫させ、国際共産主義運動をこれまでになく重大な分裂の危険に直面させ、世界平和、民族解放、人民民主主義、社会主義をめざす各国人民の事業に重大な損害をあたえたのである。

七年らいの事実があますところなく立証しているように、中国共産党は事態の悪化を阻止するために、また、原則を堅持し、意見の相違をとりのぞき、団結を強め、共同して敵にあたるために一連の努力をはらってきた。われわれは、ひじょうな忍耐をかさね、最善をつくしてきたのである。

中国共産党はこれまでずっと中ソ両党、両国の団結の重要性を強調してきた。中国共産党は偉大なレーニンがきずいたソ連共産党を一貫して尊重してきた。われわれは、偉大なソ連共産党と偉大なソ連人民にたいし一貫してプロレタリアートの深い感情を抱いている。ソ連共産党とソ連人民がかちとる成果にたいしては、われわれはいつも喜びを感じている。ソ連共産党指導部が社会主義陣営と国際共産主義運動に危害をもたらす誤りにたいしては、われわれはいつも悲しく思っている。

中国の共産主義者がソ連共産党指導部の誤りを発見したのは、なにもいまに始まったことではない。ソ連共産党第二十回大会いらい、われわれは、ソ連共産党指導部が修正主義の道を歩みだしたのを憂慮のまなこでみまもってきた。

こうした重大な事態にたいし、わが党は、かなり長い期間、どうすべきかを何十回となくくりかえし考えてきた。

ソ連共産党指導部にしたがい、なにもかもかれらの意見のままにやってよいかどうか、われわれはこのように考えてみたことがある。もちろん、このようにすれば、ソ連共産党指導部は喜ぶ

だろう。だが、これでは、われわれ自身も修正主義者に変わってしまうではないか。

ソ連共産党指導部の誤りにたいし沈黙をまもってよいかどうか、われわれはこのようにも考えてみたことがある。われわれは、ソ連共産党指導部の誤りが偶然的、個別的な小さなものではなく、一連の原則的な誤りであり、社会主義陣営と国際共産主義運動ぜんたいの利益をそこなうものであると考えた。ソ連共産党指導部のこのような誤りにたいし、国際共産主義運動の隊列の一員であるわれわれは、どうして無関心に口をつぐんでいることができるだろうか。もし、われわれがそのようにすれば、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を守る責任を放棄することになるではないか。

われわれがソ連共産党指導部の誤りを批判すれば、かならずかれらから報復的な攻撃をうけ、これによって、中国の社会主義建設の事業が重大な損害をこうむることはさけられない、われわれはそういうことも考えてみた。だが、共産主義者が報復的な攻撃をおそれて真理を堅持することができないというような民族的利己主義の立場をとることができるだろうか。共産主義者が原則を取り引きしてよいだろうか。

ソ連共産党はレーニンのきずいた党であり、最初の社会主義国の党であって、国際共産主義運動と全世界人民のあいだに崇高な権威をもっている、われわれはまたそういうことも考えてみた。

したがって、かなり長い期間にわたって、われわれはかれらを批判するとき、とりわけ慎重に、とりわけしんぼう強く、できるかぎり中ソ両党の指導者の内部的な話し合いの範囲内にとどめるようにつとめ、できるかぎり内部的な討議をつうじて意見の相違を解決することとし、公然と論争しないようにつとめてきたのである。

だが、中国共産党中央委員会の責任ある同志は数十回におよぶ内部的な話し合いのなかで、ソ連共産党指導部にたいする同志的な批判と勧告をおこなったにもかかわらず、かれらを迷路からひきもどすことができなかった。かれらは修正主義と分裂主義の道にますます深入りしていった。ソ連共産党指導部がわれわれの好意ある勧告になにをもって答えたかといえば、われわれに一連の政治的、経済的、軍事的な圧力をくわえ、われわれにますます乱暴な攻撃をくわえてきたのである。

ソ連共産党指導部には、悪いくせがある。自己を批判するものにはむやみにレッテルをはりつけるということがそれである。

かれらは、「君たちは反ソ的だ」という。そうではない。友人の諸君、「反ソ」のレッテルをわれわれにはりつけることはできない。われわれが、諸君の誤りを批判したのは、ほかでもなく、偉大なソ連共産党と偉大なソ連を守るためであり、ソ連共産党とソ連の権威が諸君によって

めちゃめちゃにふみにじられないようにするためである。その実、ほんとうにソ連に反対し、ソ連共産党とソ連を傷つけ、ソ連共産党とソ連に泥をぬっているのは、諸君であって、われわれではない。ソ連共産党第二十回大会がスターリンを全面的に否定していらい、諸君は一貫してこうした悪事をたえず数かぎりなくくりかえしてきた。諸君はボルガの水を傾けても、諸君がソ連共産党とソ連にもたらした恥を洗いおとすことはできない。

かれらは、「君たちは指導権を争っている」という。そうではない。友人の諸君、諸君のこうした中傷はまことに賢明でない。諸君の論法によると、まるで誰かが諸君と「指導権」なるものを奪いあっているかのようである。これでは、国際共産主義運動に「指導権」なるものがあり、しかもこの「指導権」が諸君の手中にあることを臆面もなくおおっぴらに言明していることになるではないか。諸君がこのように親父の党をもって自任しているのは、じつに悪いくせである。これはまったく不法なことである。一九五七年の宣言と一九六〇年の声明には、各国の共産党が独立、平等であることをはっきりとさだめている。この原則によると、兄弟党のあいだには、指導する党と指導される党の関係がぜんぜんあってはならないし、親父の党と息子の党という関係はなおさらあってはならない。われわれは、これまでどの党が他の兄弟党を指揮することにも反対してきたし、自分から他の兄弟党を指揮しようとおもったこともない。指導権争いなどということはまったく問題にならない。いま、国際共産主義運動のまえに提起されているのは、この党が指導するかあの党が指導するかという問題ではなく、とどのつまり、修正主義の指揮棒にしたがうか、それとも宣言と声明の革命的原則を堅持し、マルクス・レーニン主義の革命的路線を堅持するかという問題である。われわれがソ連共産党指導部を批判するのは、かれらが兄弟党のうえにのしかかり、自己の修正主義と分裂主義の路線をむりやりに兄弟党におしつけようとしているからにほかならない。われわれがもとめているのは、宣言と声明がさだめている兄弟党の独立、平等の地位だけであり、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を基礎とした各国兄弟党の団結だけである。

当面、国際共産主義運動の大論戦は、ソ連共産党指導部が一手にひきおこし、拡大してきたものであり、かれらがわれわれにおしつけてきたものである。ソ連共産党指導部は、われわれに大がかりな攻撃をくわえ、われわれに手段をえらばぬさまざまの中傷をくわえている以上、また、ソ連共産党指導部がマルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義を公然と裏切り、宣言と声明を公然と破りすてた以上、これにこたえず、デマをうちくだかず、宣言と声明を守らず、マルクス・レーニン主義を守らないようにとわれわれに期待をかけることはできない。論戦がすでに始まった以上、どこまでも是非をはっきりさせなければならない。

中国の共産主義者は、過去、現在、将来をつうじて、原則を堅持し、団結を堅持する。われわれはソ連共産党指導部と論戦するにあたっても、ソ連共産党指導部がつぎの点をみてとることができるよう依然としてのぞんでいる。諸君が革命を必要とせず、全世界の革命的人民を必要とせず、社会主義陣営の団結と国際共産主義運動の団結を必要とせず、ひたすらアメリカ帝国主義、各国の反動派、裏切り者チトー一味と協力するのはきわめて危険な道であるということがつまりそれである。

中ソ両国人民の利益、社会主義陣営の利益、国際共産主義運動の利益、全世界人民の利益は各国の共産党、労働者党が団結して共同の敵に反対することを要求している。

われわれはここで、ソ連共産党指導部が誤りをあらため、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の軌道に戻り、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明の軌道に戻るよう、ふたたびよびかける。

国際共産主義運動は、いま、重要な時期に直面している。当面の論戦は、プロレタリア世界革命の前途と人類の運命にかかわるものである。この大論戦によってマルクス・レーニン主義がいっそうさんぜんと輝き、国際プロレタリアートと全世界人民の革命事業がもっと偉大な勝利をかちとることを歴史は証明するであろう。

付録一

平和移行の問題にかんする意見の要綱

（一九五七年十一月十日）

（一）資本主義から社会主義への移行の問題について、たんに一つの可能性だけでなく、平和的と非平和的という二つの可能性を提起しておけば、わりに融通性があり、われわれは政治上いつも主動的な地位に立つことになる。

1、平和移行の可能性を提起することは、われわれが暴力を使用するのはまず防御的なものであることをあきらかにし、資本主義国の共産党にこの問題でうける攻撃を回避させ、政治的に有利である。つまり、大衆をかちとるのに有利であり、ブルジョアジーの口実をうばい、ブルジョアジーを孤立させるのに有利である。

2、将来、国際情勢あるいは国内情勢がはげしく変化する条件のもとで、もし個別の国に平和移行の実際の可能性があらわれたなら、われわれはいちはやく時機を利用して、大衆の支持をかちとり、平和的な方法で権力の問題を解決することができる。

3、しかし、われわれはこうした希望によって自分をしばりつけてしまってもならない。ブル

ジョアジーは、みずからすすんで歴史の舞台をひきさがるようなことはない、これは階級闘争の普遍的な法則である。どの国のプロレタリアートと共産党も、革命の準備をすこしもゆるめてはならない。いつでも反革命の襲撃をむかえうつ用意をしておかねばならず、労働者階級が権力を奪取する革命の緊急のさい、もしもブルジョアジーが武力で人民の革命を弾圧してくるなら（総じて、これは必然的なものである）、武力でそれを打ち倒す用意をしておかねばならない。

（二）当面の国際共産主義運動の状況では、戦術的観点から出発して、平和移行の願望を提起することは有益なことである、だが、平和移行の可能性を強調しすぎることは妥当でない。なぜなら、

1、可能性と現実、願望と願望を実現できるかどうかということは、別の事柄である。われわれは平和移行の願望を提起すべきではあるが、自己の希望を主としてこれにかけるべきでなく、この面を強調しすぎてはならない。

2、もし平和移行の可能性を強調しすぎるなら、とくに議会で多数をかちとることによって権力をとる可能性を強調しすぎるなら、容易にプロレタリアート、勤労者、共産党の革命的意志をたるませ、思想的に自己の武装を解除することになる。

3、われわれの理解するところによると、こうした可能性は現在まだどの国でも現実的な意義

をもつにいたっていない。個別の国はこうした可能性がわりに多くしめされているとはいえ、圧倒的多数の国にとっては実際に合致しておらず、したがって、この可能性を強調しすぎることは妥当でない。ある国に真にこうした可能性が現われたばあいでも、共産党は一方では、こうした可能性をかちとるとともに、他方ではいつでもブルジョアジーの武力攻撃をむかえうつ用意をしておかなくてはならない。

4、こうした可能性を強調しても、ブルジョアジーの反動性を弱める役割は果たしえないし、ブルジョアジーをマヒさせる役割も果たしえない。

5、社会党についてみても、これで社会党をいくぶんでも革命的にするということはできない。

6、また、これで各国の共産党をいくぶんでも伸ばすということもできない。逆に、もしいちぶの共産党がこのため自己の革命的な姿をぼやかし、大衆の目にうつる共産党が社会党と混同されてしまうようになれば、それは、ただ共産党を弱めるだけである。

7、力をたくわえ、革命を準備することは、もっとも骨の折れることであるのにたいし、議会闘争はなんといってもわりに安易なものである。われわれは議会闘争の方式を十分運用しなくてはならない、だが、その役割には限度がある、やはりもっとも大切なのは、革命の力をたくわえるという骨の折れる仕事をすすめるべきである。

（三）議会で多数を占めても、けっしてふるい国家機構（主として武力）の粉砕、新しい国家機構（主として武力）の樹立ということにはならない。もしもブルジョアジーの軍事的官僚的国家機構が粉砕されていなければ、プロレタリアートとその信頼できる同盟者が議会で多数をしめることは、不可能であるか（ブルジョアジーは自己の独裁をかためるのに有利なようにいつでも必要におうじて憲法を改定する）、あるいはあてにならない（たとえば選挙の無効を宣言したり、共産党の非合法化を声明したり、議会を解散するなど）。

（四）社会主義への平和移行の意味を、ただ議会の多数をつうじての移行とのみ解釈すべきではない。主要な問題は国家機構に関する問題である。マルクスは十九世紀の七〇年代に、社会主義がイギリスで平和的に勝利する可能性を認めた。なぜなら、イギリスは「当時、軍国主義と官僚制度のもっともすくない国であった」からである。レーニンは二月革命後のある時期、「すべての権力をソビエトへ」をつうじ、革命を平和的な発展を経て勝利させようと望んだ。それは、当時、「武器が人民の手ににぎられていた」からである。マルクスとレーニンの定式はともに、ふるい国家機構を利用して平和移行を実現させるということを意味していない。「労働者階級はできあいの国家機構をそのままわが手ににぎって、自分自身の目的のためにつかうことはできない」というマルクスとエンゲルスの名言をレーニンはくりかえし解釈した。

（五）社会党は社会主義の政党ではない。ごくいちぶの左派をのぞいて、かれらはブルジョアジーに奉仕し、資本主義に奉仕する政党であり、ブルジョア政党の一変種である。社会主義革命の問題について、われわれと社会党の立場は根本的にちがっている。このような区別をあいまいにしてはならない。このような区別をあいまいにすることは、社会党の指導者が大衆をあざむくのに有利であり、われわれが社会党の影響下の大衆を獲得するのに不利である。しかし、社会党にたいする働きかけを強め、社会党の左派および中間派と統一戦線をうちたてることがひじょうに重要であることはいささかの疑いもない。

（六）以上はこの問題にたいするわれわれの見方である。われわれはちがった意見をもっているが、いろいろ考慮したうえ、二十回大会以後、われわれはこの問題について意見を発表したことがなかった。いま共同宣言を発表することになったので、われわれの観点を説明せざるをえない。だが、これはけっして宣言草案のなかで共通の言葉をかちとることのさまたげとなるものではない。宣言草案がこの問題でソ連共産党第二十回大会の定式とつじつまをあわせることをあきらかにするため、われわれはソ連共産党中央委員会が本日提出した原稿を基礎として、個々の部分を改正することに同意する。」

付録二

ブカレストの兄弟党会談における中国共産党代表団の声明

（一九六〇年六月二十六日）

（一）中国共産党中央委員会はつぎのように考える。今回の会談にさいし、ソ連共産党中央委員会代表団のフルシチョフ同志は、国際共産主義運動のなかでは兄弟党が話し合いをつうじて共通の問題を解決するというこれまでの原則を完全に破壊し、今回の会談では意見の交換にとどめ、なんらの決定をもおこなわないという会談まえのとりきめを完全に破壊して、抜き打ち的に会談コミュニケの草案を提出したが、この草案の内容については、あらかじめ兄弟党の意見をもとめておらず、また、会談で十分に正常な討議をおこなうことも許さなかった。これは、レーニンいらい長期にわたってソ連共産党がつくりあげてきた国際共産主義運動での権威を濫用して、まったく乱暴にも自己の意志を人におしつけるものである。このような態度はレーニンの作風とはなんら共通するところがなく、このようなやり方は国際共産主義運動にきわめて悪い前例をつくるものである。フルシチョフ同志のこのような態度とこのようなやり方は国際共産主義運動にひじょうに重大な結果をもたらすものと、中国共産党中央委員会は考える。

（二）中国共産党は一貫してマルクス・レーニン主義に忠実であり、マルクス・レーニン主義の理論的陣地を堅持してきた。また、この二年あまりの間、一九五七年のモスクワ宣言にまったく忠実であり、宣言のなかのマルクス・レーニン主義的な諸論点をあくまでまもってきた。われわれは、マルクス・レーニン主義の一連の基本原則で、フルシチョフ同志と意見の相違がある。こうした意見の相違は、社会主義陣営ぜんたいの利益にかかわるものであり、全世界のプロレタリアートと勤労者の利益にかかわるものであり、世界各国の人民が世界平和をまもり、帝国主義戦争を制止できるかどうかにかかわるものであり、社会主義が全地球の三分の二の人口と四分の三の土地を占める資本主義世界でひきつづき勝利をおさめうるかどうかにかかわるものである。これらの意見の相違をみる問題にたいしては、いかなるマルクス・レーニン主義者も、厳粛な態度で、まじめに考え、同志的な討議をおこなって、一致した結論をえなければならない。ところが、フルシチョフ同志は、家父長的な、独断的な、横暴な態度をとった。フルシチョフ同志は、実際には、偉大なソ連共産党とわが党との関係を兄弟党の関係とみないで、親子の党の関係とみている。今回の会談にさいし、フルシチョフ同志は、圧力をかけて、わが党をかれの非マルクス・レーニン主義的な観点に屈従させようとくわだてた。わが党は、マルクス・レーニン主義の真理に信服するだけであって、マルクス・レーニン主義にそむくあやまった観点にはけっして屈従す

るものでないということを、われわれはここに厳正に声明するものである。われわれは、ルーマニアの党の第三回大会におけるフルシチョフ同志の発言のうち、いくつかの観点はあやまっており、モスクワ宣言にそむくものであると考える。フルシチョフ同志のこの発言は、帝国主義とチトー一味に歓迎されるものであり、げんに歓迎されている。こんど、われわれは、機会があれば、ひきつづきソ連共産党およびその他の兄弟党とともに、われわれとフルシチョフ同志との観点のくいちがいについてまじめに討議する用意がある。フルシチョフ同志がこんどブカレストで配布した「ソ連共産党の中国共産党への通知書」にたいしては、中国共産党中央委員会は、詳細に検討してからくわしい回答をおこない、両党間の原則的な意見の相違と、関係ある事実の真相をあきらかにし、各兄弟党と厳粛でまじめな同志的な討議をおこなうであろう。いずれにせよ、マルクス・レーニン主義の真理はさいごにはかならず勝利するものと、われわれは信じている。真理は論争を恐れない。究極のところ、真理を誤りだということはできないし、誤りを真理だということもできない。国際共産主義運動の運命は、各国人民の要求と闘争によって決まるものであり、マルクス・レーニン主義の指導によって決まるものであって、けっして誰かの指揮棒によって決まるものではない。

(三) われわれ中国共産党は一貫して各国共産党の団結をまもり、社会主義各国の団結をまも

るためにたたかってきた。国際共産主義の隊列の真の団結のため、また帝国主義と反動派に共同してあたるためには、意見の相違の問題について正常な討議をくりひろげるべきであり、厳粛な原則問題をあわただしく、不正常な方法で、簡単な表決によって処理すべきではないし、また、自己の独断的な、事実によってたしかめられていない観点、あるいは事実によって誤りであることが立証された観点をむりやりに他人におしつけるべきではないと、われわれは主張する。今回の会談でのフルシチョフ同志のやり方は、国際共産主義の団結にとってまったく不利なものである。だが、フルシチョフ同志のやり方がどうであろうと、中ソ両党の団結と各国共産党、労働者党の団結は、結局はひきつづきかためられ、発展してゆくであろう。国際共産主義運動の発展、マルクス・レーニン主義の発展にともなって、われわれの隊列の団結はきっとたえまなくかためられ、発展するものと、われわれは確信する。

(四) われわれが以上にのべたわれわれとフルシチョフ同志との意見の相違は、われわれ両党の関係ぜんたいからみれば、やはり部分的な性質のものである。われわれは、われわれ両党の共同の事業のための奮闘と団結がやはり主な部分をしめていると考える。なぜなら、われわれ両国はともに社会主義国であるし、われわれ両党はともにマルクス・レーニン主義の原則にもとづいて創立された党であり、ともに社会主義陣営ぜんたいの事業を発展させ、帝国主義の侵略に反対

し、世界平和をめざしてたたかっている党であるからである。われわれとフルシチョフ同志およびソ連共産党中央委員会は機会をみつけて冷静に同志的な話し合いをおこない、われわれの間の意見の相違を解決して、中ソ両党がいっそう団結し、その関係がいっそうかためられるようにすることができると、われわれは信じている。われわれがこうすることは、帝国主義の侵略に反対し、世界の平和をめざす社会主義陣営と世界人民の闘争の事業にとってきわめて有利となるであろう。

（五）われわれは、今回の会談で提出された「会談コミュニケ草案」の声明がモスクワ宣言の正しさを確認しているのをみて、ひじょうによろこばしく思っている。だが、この草案がモスクワ宣言のなかのマルクス・レーニン主義的な諸論点にたいしておこなっている説明は、的確でない一面的なものである。この草案は、当面の国際情勢の重大問題にたいして態度を表明しておらず、国際労働運動の主な危険である現代修正主義にはまったくふれていない。これは誤りである。そのため、われわれは、この草案を受けいれることができない。一致団結して、共同して敵にあたるために、われわれは修正草案を提出し、討議するよう提案する。もしもこんど話しあいがまとまらなければ、専門の起草委員会をつくり、十分に討議して、誰もがこぞってうけ入れることのできるような文書を作成するよう提案するものである。

附録三

ソ連共産党中央委員会の通知書にたいする中国共産党中央委員会の返書のなかの、意見の相違を解決し、団結をかちとることについての五項目の提案

（一九六〇年九月十日）

意見の相違を首尾よく解決して、団結をかちとるため、われわれは誠意をもってつぎのように提案する。

（一）マルクス・レーニン主義の根本的原理と一九五七年のモスクワ会議の二つの宣言の原則は、われわれ両党が団結し、すべての兄弟党が団結する思想的な基礎である。われわれのあらゆる言論と行動はみな、マルクス・レーニン主義の根本的原理とモスクワ宣言の原則にぜったい忠実でなければならず、これをもって是非を判断する基準としなければならない。

（二）社会主義国間の関係、兄弟党間の関係については、モスクワ宣言の規定した平等で、同志的な、国際主義の原則を厳格にまもるべきである。

(三) 社会主義国間、兄弟党間の関係におけるすべての論争は、モスクワ宣言の規定にもとづいて、同志的にゆっくり討議して解決しなければならない。ソ中両国、両党は、国際情勢と国際共産主義運動にたいして重大な責任を負っており、ともに関係のあるすべての重大問題にたいしては、十分に話し合い、ゆっくりと討議して、一致した措置をとるべきである。もし中ソ両党の論争が一時両党の話し合いで解決できなければ、ひきつづきゆっくりと討議すべきである。必要なばあいには、双方の意見をまったく客観的に各国の共産党、労働者党に提供して、かれらが真剣に考え、マルクス・レーニン主義とモスクワ宣言の原則にもとづいて正しい判断をくだせるようにすべきである。

(四) 共産主義者にとっては、敵と味方のあいだ、是と非のあいだに一線をひくことがもっとも重要である。われわれ両党は、友宜を大切にし、共同して敵にあたるべきであって、両党、両国の団結を破壊するようなんらかの言論や行動をとって、敵に乗じられるスキをあたえるべきではない。

(五) われわれ両党は、上述の基礎のうえに立って、各国の共産党、労働者党とともに、十分な準備と話し合いをおこなったのち、ことし十一月の各国共産党・労働者党代表者モスクワ会議を首尾よく開き、また、この会議で、マルクス・レーニン主義の根本的原理と一九五七年のモス

クワ宣言の原則に合致する文書を作成して、これをわれわれが共同してしたがい、団結して敵にあたるための闘争綱領とすべきである。

ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違の由来と発展
ソ連共産党中央委員会の公開書簡を評す

1963年 10月 初版発行　　定価 40 円

出版者　外文出版社
（北京阜成門外百万莊）
発行者　中国国際書店
（北京399号信箱）

編号：（日）3050—714　　3—J—569P
00051